

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370958

研究課題名(和文)水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究

研究課題名(英文)An Anthropological Study of Communities of Minamata Disease Victims' Supporters

研究代表者

平井 京之介(HIRAI, KYONOSUKE)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号：80290922

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NGOを対象として、計10ヵ月にわたる、人類学的アプローチを用いた現地調査を実施し、データを収集した。その結果、このNGOは、水俣病被害者を支援する社会運動を通じて新しい知識を蓄積していること、その知識を広めることを通じて社会を変容させようとしていること、またそれらの過程を通じて、国家や社会との関係をつねに変化させていることなどが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research has conducted ten months anthropological fieldwork about an NGO in Minamata, Kumamoto. The research found out that this NGO produces new bodies of knowledge by engaging in activities to support Minamata disease victims, tries to change society by transmitting the knowledge, and, through the process, continuously transforms the relations with the state and society.

研究分野：社会人類学

キーワード：文化人類学 民族誌 社会運動 NPO 市民社会 水俣病 公害 コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年のコミュニティ研究は、グローバル化によって生じた社会生活の再編成のなかから、移民のネットワークや自助グループ、人権・環境NGOなど、従来とは異なるタイプのコミュニティが出現していることを明らかにしてきた (Bauman 2001; Delanty 2003; 小田 2004)。本研究では、従来の社会科学にみられるように、社会運動を現在の生活形態に対する不満から、権威者や敵対者に立ち向かおうとする集合的な企てとみなすのではなく (e.g. Tarrow 1998)、こうした新しいタイプのコミュニティ、すなわち人びとが状況に応じてみずからの生をつくりかえようとする実践の場としてとらえることを試みた。

ここにおいてコミュニティの視点から運動に人類学的にアプローチすることとは、コミュニティを、実践を通じてつねに再構築されるものとみる、社会とコミュニティとの関係がコミュニティの存在の様態に反映されるとみる、コミュニティにおいて知や実践の様式が再帰的に編成されるとみる、ことを意味する。

社会科学において水俣病事件は、初期の画期的な共同研究、色川(1983)を除くと、最近までほとんど研究対象になってこなかった。近年、水俣病事件を扱った二冊の編著(丸山他 2004; 丸山他 2005)がまとめられ、それ以降、少しずつ研究成果が出されるようになってきた。ただしその多くは環境社会学的研究であり、運動を扱う研究や、人類学からアプローチするものはきわめてかぎられている。日本の社会運動史におけるその重要性を考えると、水俣病運動の歴史は、運動初期の関係者の証言や各種資料が集められるうちに、早急に調査研究される必要があった。

(2) 2005年、研究代表者は本研究の調査対象である水俣市のNGOにおいて、水俣病の教訓を伝える活動に焦点を当てて、約6ヵ月間の人類学的調査をおこなった。

また、研究代表者は、2006年から2010年にかけて国立民族学博物館の共同研究『東アジア・東南アジア地域におけるコミュニティの政治人類学』を組織し、その成果を『実践としてのコミュニティ 移動・国家・運動』(京都大学学術出版会 2012)として発表した。研究代表者はその序論で、コミュニティ(共同体)という概念の理論的検討をおこない、第11章で、水俣病被害者支援NGOの水俣病の教訓を伝える活動について論じた。

2012年には、『国立民族学博物館研究報告』36(4)において、水俣病歴史考証館と水俣市立水俣病資料館とを比較する博物館人類学的研究の成果を発表した。

以上の研究を遂行する間に、水俣病被害者支援運動に影響を与える次の二つの事態が生じた。

2011年に発生した東日本大震災、福島第

一原発事故と、その後の原発反対運動の興隆である。日本の社会運動は新しい段階に入ったといわれるようになり、これとの関連で、水俣病事件が再クローズアップされるようになった。

2009年に「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」が制定され、その後救済措置が実施されたことである。その結果、運動は新たな局面を迎えることになった。

こうしたことから、水俣病被害者支援運動の歴史全体を視野に入れながら、その新しい局面の本格的な研究に早急に着手すべきと研究代表者は考えるに至った。2005年に私費で実施した調査研究が、当時の調査対象NGOの水俣病の教訓を伝える活動に焦点を絞ったものであったのに対し、本研究は対象をさらに広げ、1970年代半ばからの水俣病被害者支援運動の歴史と、その国家統治や資本主義との関係の歴史の変遷を視野に入れるものである。

2. 研究の目的

本研究では、水俣病被害者支援NGOという運動のコミュニティの実践とその歴史を明らかにするため、以下のような調査研究を実施した。

NGOにおいて人類学的調査をおこない、現在の活動内容、組織、メンバーの社会的属性、メンバーどうしの関係性、所有する運動の資源、メンバーが志向する社会のイメージについてデータを収集した。特に、民間知識や儀礼的知識、社会的記憶など、そこで蓄積される知と実践の様式に注目した。

関係者からの聞き取り調査を通じて、NGOと、行政機関や政治団体、水俣病原因企業、マスメディア、地元社会、他の運動団体との関係およびその歴史の変遷を把握した。

水俣病被害者支援運動経験者、とりわけ元NGOメンバーから、過去40年間の水俣病被害者支援運動の歴史について聞き取り調査をおこなった。

文献調査をおこない、水俣病被害者支援運動の歴史の変遷についてデータを収集した。

3. 研究の方法

本研究では、あるひとつの水俣病被害者支援NGOおよび水俣市周辺における計10ヵ月間の現地調査を含む3年間の研究計画を設定した。現地調査においては、参与観察を中心とする人類学的な調査方法を採用し、歴史的データの収集については聞き取り調査と文献資料調査で補足した。平成25年度に調査対象NGOのコミュニティの実態を把握する調査研究を実施したうえで、平成26年度にはそのコミュニティに蓄積される知と実践の様式、さらに国家統治や資本主義との関係に焦点を当てた集約的な調査研究に取

り組んだ。平成 27 年度は、前年度までに蓄積された歴史的データを、聞き取り調査と文献調査によって補足した。調査期間全体を通じて、NGO を現地研究拠点とし、調査の進捗状況についてつねに研究協力者と共同で検討しながら計画を遂行した。

平成 25 年度は、NGO の活動の実態を把握するための約 2 ヶ月間の現地調査を実施し、そこでのコミュニティの状況を把握した。NGO の現在の活動内容、組織形態、メンバーの社会的属性、メンバーどうしの関係性、所有する運動の資源等について集約的な調査をおこない、データを収集した。調査においては、可能な限り、研究代表者が NGO の活動に参加しながら観察する、いわゆる参与観察を中心として、ランダムな観察やインフォーマルなインタビュー、簡単な質問票を用いたライフヒストリー調査などを組み合わせた、人類学的な調査方法を採用した。運動の歴史については NGO 等が所蔵する映像・文献資料の調査で補った。調査対象 NGO についてはすでに 2005 年の調査で基礎的なデータを収集してあったが、8 年が経過してメンバーの多くが入れ替わっていると同時に、水俣病事件を取り巻く環境の変化から影響を受けていたため、これらの項目すべてについてははじめから確認していった。

平成 26 年度も約 2 ヶ月の現地調査を実施し、引き続き NGO のコミュニティの実態調査を継続したが、特に民間知識や儀礼的知識、社会的記憶など、NGO に蓄積された知や実践の様式に焦点を当てた。さらに、関係者からの聞き取り調査によって、NGO と、行政機関や政治団体、水俣病原因企業、マスメディア、地元社会との関係を把握した。コミュニティがこれらの団体や制度から介入を受ける過程と、コミュニティがこれらの団体や制度に適応し自らを変容させる過程の双方を調査研究の中心に置いた。

平成 27 年度は、1970 年代から現在までの調査対象 NGO のコミュニティの歴史の変容過程を明らかにするための補足的な調査研究をおこなった。水俣市周辺に居住する水俣病被害者支援運動経験者、特に過去 40 年間の NGO の元メンバーらから、運動の歴史について聞き取り調査を実施し、データを収集した。この際、被調査者の選定にあたっては、研究協力者である NGO 常務理事にアドバイスをもらうとともに、可能な範囲で仲介を依頼した。また、水俣病歴史考証館、水俣市立水俣病資料館、国立水俣病総合研究センター、熊本学園大学水俣現地研究センター等において資料調査を実施し、水俣病被害者支援運動の歴史についての分析に取り組んだ。

4. 研究成果

(1) 研究の成果

計 10 ヶ月の現地調査で得られたデータを分析することにより以下のようなことが明らかになった。

NGO の活動実態

平成 25 年度は、調査対象 NGO および水俣市周辺において、約 2 ヶ月間の現地調査を実施し、NGO の現在の活動内容、組織形態、メンバーの社会的属性、メンバーどうしの関係、所有する運動の資源等についてデータを収集した。その結果、平成 17 年に実施した調査結果と比べて二つの大きな変化が生じていることが明らかになった。

ひとつは、世代交代の進行である。90 年代以降、NGO の活動をリードしてきた 60 歳代のメンバーに代わり、30 歳前後の新しいメンバーが活動の中心になっており、それにもなって活動の方向性や運営方法等に変化が顕れ、ときにはそれが困難を生じさせていることが明らかになった。このことは、この団体に限られたことではなく、水俣で被害者を支援している多くの市民団体において観察されることであることもわかった。

もうひとつは、市民団体と行政との関係の変化である。現地調査において、NGO のメンバーとともに水俣市および熊本市でおこなわれた国際水銀条約会議、水俣市立水俣病資料館の展示リニューアル検討会議に準備段階から参加した。これらの活動を通じて、これまで敵対的な態度をとることが多かった水俣病被害者を支援する市民団体と熊本県や水俣市とのあいだで、少しずつではあるが信頼関係が醸成され、ときには協働するようにさえなっていることが確認された。このことは、市民団体の活動の方向性を理解するうえできわめて重要な要件である。

NGO 内部での世代間の対立

平成 26 年度は、調査対象 NGO および水俣市周辺において、約 2 ヶ月間の現地調査を実施し、特に NGO に蓄積された知や実践の様式を中心にデータを収集することができた。その結果、NGO の 60 歳代のメンバーと 30 歳前後のメンバーとのあいだで、異なる知識や経験、価値観、行動パターンを基礎として、活動の方向性や運動方法をめぐって意見の相違が大きくなっていることが確認された。

60 歳代のメンバーは改革志向的で、相互に主体性を競うような、1960 年代後半の学生運動に通じる運動のスタイルを維持しようとしていたのに対し、30 歳前後の新しいメンバーは現状維持的で、より協調性を重視し、いわば NPO 志向と呼べるような活動のスタイルを好む傾向が顕著にもみられた。こうした方向性や運動方法めぐる差異は、財政が厳しさを増している現在の NGO の活動において、さまざまな局面で深刻な意見の対立を引き起こしていた。

NGO の歴史と現在

平成 27 年度は、約 6 ヶ月間の現地調査を実施し、これまでの NGO の活動についての

人類学的な調査を継続するとともに、最近の活動内容や人間関係の変化の前提となっているNGOの歴史を明らかにするための補足調査をおこなった。具体的には、水俣市周辺に居住する水俣病被害者支援運動経験者、特にNGOの元メンバーから運動の歴史について聞き取り調査を実施し、データを収集した。また、水俣病歴史考証館、水俣市水俣病資料館等において調査を実施し、水俣病被害者支援運動の歴史についての文献資料を収集した。

これらの調査を通じて以下のことが明らかになった。第一に、現在のNGOの活動の基礎にある知識は、長年にわたる運動のなかで蓄積されたものであり、学校教育や行政、マスコミ等を通じて伝えられる水俣病の知識とはその内容や形態において異なるものになっている。第二に、1990年代以降、行政がNGOを統治しようとする過程と、NGOが行政を利用して自らの利害を追求しようとする過程の両方が同時進行している。第三に、NGOの活動の変化は、市民運動から住民運動、さらにはNPO活動へと日本の社会運動または市民社会の歴史の大きな流れのなかに位置づけることによって深く理解が可能になる。

(2) 成果の位置づけとインパクト

本研究は、社会運動研究において、コミュニティという独自の人類学的アプローチを用いて貢献するものとして位置づけられる。このアプローチでは、運動のなかでの新しい知や実践の様式が蓄積される過程に注目するとともに、コミュニティが標的となって統治が促進される過程と、コミュニティが国家統治や資本主義を利用して、それらの要求と自らの利害とを橋渡ししようとする過程の双方を視野に収める点に、従来の社会運動論とは異なる独創性がある。

福島第一原発事故以来、日本の社会運動は新しい局面を迎えたといわれるようになった。かつてとは異なり、運動が達成しようとする変化の性格は、文化的なものになっているとされる。上記の人類学的アプローチの提示によって、運動研究の進展に大きく貢献するだけでなく、人類学における運動研究という、国内ではあまり知られていない新しい学問分野の可能性を示すことができた。

水俣病被害者支援運動は、日本の社会運動の歴史においてきわめて重要な位置を占める。そのなかでも調査対象NGOは、1974年の創設以来中心的な役割を担ってきただけでなく、メンバーや活動内容、運動の方向性を大きく変えながらも、現在まで継続しているというきわめてまれな団体である。このコミュニティの歴史的変遷を追うことによって、日本の社会運動の歴史と現状、また社会の政治構造の変化について、新たな見通しを得ることができた。

初期の水俣病被害者支援運動に参加した

人びとは現在高齢化しているとともに、各種関連団体のなかには、資金不足や人手不足により、記録文書の散逸が進んでいるところが少ない。近い将来失われる可能性のある運動関連の歴史的資料を収集することができた。

現在、広く日本社会において社会運動に対する関心が高まっているが、水俣病事件や被害者支援運動からの教訓を提示するための準備を整えることができた。

(3) 今後の展望

本研究の成果は、事業期間中にすでいくつかの雑誌論文等として刊行されている。しかし本研究で3年間に現地で集めた調査データおよび文献資料は膨大であり、その分析はまだ完了していない。これを今後継続して進めるとともに、さらなる補足調査等を実施して、平成29年度を目途にまとめた成果のとりまとめを目指している。また、平成27年度に国際シンポジウムの成果として発表した英語論文集の編集過程において、国内だけでなく、韓国、台湾の社会運動研究者と研究交流を進めることができたため、今後さらにこのネットワークを拡げていくための活動を考えていきたい。

本研究は水俣で活動するひとつの水俣病被害者支援NGOに焦点を絞った研究であったが、そのなかで明らかになったことの一つは、このNGOの歴史を理解するためには水俣地域全体で活動するさまざまな団体の関係やその歴史を視野に収めることの必要性である。それゆえ、今回の調査対象NGOに焦点を当てた人類学的な研究を今後も継続していくと同時に、今後は水俣社会全体を視野に入れ、さまざまなアクターのあいだで水俣病という負の文化遺産がどのように扱われてきたかを歴史的に追跡する研究に着手してみたい。

<引用文献>

Bauman, Z. 2001 Community. Cambridge: Polity Press.

Delanty, G. 2003 Community. London: Routledge.

小田亮 2004 「共同体という概念の脱/再構築」『文化人類学』69(2) 236-246.

Tarrow, S. 1998 Power in Movement. Cambridge: Cambridge University Press.

色川大吉 1983 『水俣の啓示』筑摩書房。

丸山定巳他 2004 『水俣の経験と記憶 問いかける水俣病』熊本出版文化会館。

丸山定巳他 2005 『水俣からの想像力 問いつづける水俣病』熊本出版文化会館。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

Kyonosuke Hirai, Social movements and the production of knowledge: body, practice, and society in East Asia, *Senri Ethnological Studies*, 査読有、91号、2015年、pp.1-22。

Kyonosuke Hirai, Storytelling as political practice: habitus and social change in the Minamata disease movement, *Senri Ethnological Studies*, 査読有、91号、2015年、pp.81-99。

平井京之介、「『公害』をどう展示すべきか 水俣の対抗する二つのミュージアム」竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の遺産 戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』、査読無、2015年、pp.148-177。

〔学会発表〕(計 1件)

Kyonosuke Hirai, Storytelling and change in the habitus: an emergent form of Minamata Disease victims' movement in Japan, 国立民族学博物館機関研究国際シンポジウム、2014年2月22・23日、国立民族学博物館(大阪府・吹田市)。

〔図書〕(計 1件)

Kyonosuke Hirai (編) National Museum of Ethnology, Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia, 2015年、196頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平井 京之介 (HIRAI, Kyonosuke)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号：80290922